

## 教職課程だより

46

2022.3

## 「本学の教職課程で学ぶ皆さんへ」

教職支援室 室長 奥田 宏志

芝浦工業大学の前身は、1927年に「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」を建学の精神として、有元史郎により創設された東京高等工商学校です。その後、東京高等工学校、芝浦高等工学校へと校名を改称し、1944年に芝浦工業専門学校となりました。1949年学校教育法に基づく学制改革に伴い芝浦工業大学となり、5年後の1954年に本学の教職課程は始まりました。本学の特徴を生かし、工学専門教育を基礎に数理学に優れた豊かな教育的実践能力を持ち、社会において信頼と尊敬を獲得しうる教員の育成を目指してきました。建学の精神は今なお引き継がれており、本学の教職課程で学んだ多くの卒業生が教壇に立ち活躍しています。

我が国の教員養成は、「開放性の教員養成」の原則により、国立・公立・私立の多くの大学において行われてきました。しかし昨今の社会状況の変化は著しく、それに伴い教育現場の課題は複雑化・多様化し続けています。いじめや不登校、貧困による教育格差など新たな教育課題が生じている中で起きた新型コロナウイルス感染拡大は、社会全体に大きな変化をもたらし教育現場の複雑化・多様化した課題をより一層

浮き彫りにしました。

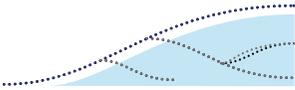
こうした教育現場における状況の変化の中、教育職員免許法及び同法施行規則の改正を経て大学では新しい教職課程が始まっています。本学もこのような社会の要請にこたえるべく、2021年に全学的な組織として、教職イノベーション推進センターに「教職支援室」を新設しました。大学での教員養成の段階から、複雑化・多様化した教育課題に対応するための必要な知識や技能の獲得をサポートし、学生に対する丁寧な指導を通じて理工系分野における質の高い教員を育成することを目指しています。

教育職員免許状取得には、卒業するために必要な条件と教育職員免許状取得に必要な条件の両方を満たす必要があります。教育職員免許状取得の基礎要件は「学士の学位を有すること」になっていますので、第一に自身が所属する学科における学びを大切にしてください。学科毎に決められた履修制限のもと、計画的に履修し質の高い学びを続けて欲しいと思います。その先に教職課程があり、教育課題に対応するための必要な知識や技能を獲得することに繋がっていきます。それらの学びを通して工学専門教育

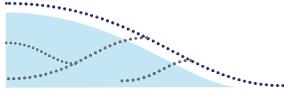
の数理科学に優れた豊かな教育的実践能力が身に付くと考えています。

正課である専門科目や教職課程科目の学修に加え、正課外活動のなかで考え方や世代が異なる人たちとの交流をすることは、社会において信頼と尊敬を得る上で大切な姿勢や態度の学びに繋がります。様々な場面において困難を抱え

た時は、教職支援室に関わる教員、職員が一体となってサポートしていきます。また、教員を目指す学生・院生同士が交流できるような場として勉強会等も行っています。一人でも多くの人が、複雑化、多様化した教育現場に貢献する教員を目指してくれることを期待し、支援していきます。



## 介護等体験記



介護等体験は、義務教育諸学校の教員免許状の授与を受ける際に必要とされる介護などを基調とする体験活動のことです。多様な人々の立場を理解し、価値観の違いを認め、共感することのできる教員を養成することを目的にしています。そのため、介護等体験は人間教育としての貴重な場面であると位置づけることができると思います。今号では、3年生から介護等体験で得たことを書いていただきました。2年生、1年生の皆さんの準備に役立てばと思います。

### 「介護等体験を通して伝えたいこと」

システム理工学部 数理科学科 佐藤 大祐

私は放課後等デイサービスを実施する施設で5日間介護等体験を行いました。放課後等デイサービスとは、就学している障がい児を対象に、放課後や学校の休業日に生活能力の向上のために必要な訓練や、社会との交流の促進などを行う支援を指します。

施設に行く前は「子ども好きだからすぐに馴染める、初対面でも大丈夫だろう」と、あまり難しく考えていませんでした。しかし実際に施設に行くと「どうしたら良いか分からない」という状態になりました。というのも、最初に施

設長から「このプリント（日誌のようなもの）を毎回提出して、後は自由にしてもらえばいい」と言われたからです。初めて会う障がいを持つ子どもを目の前にして、その言葉は冷たいなとさえ感じました。初日は何もできず、ほとんど施設の方と話して終わりました。二日目からは、前の日に施設の方と話した内容—子どもへの接し方と、それぞれの子どもの特徴—が生かされ、少しずつ子どもたちと打ち解けることが出来ました。その子の好きなこと、嫌いなことが少しずつ分かってきました。施設における子どもの活動について、雨天の日以外は、基本的に施設内で遊んだ後、公園に出かけました。また、この施設はただ遊ぶだけでなく、週に何回か別の施設から音楽や図工の先生が来てくれ

ます。図工の時間には絵を描いたり、音楽であればみんなで一緒に歌を歌ったりしました。

こうした5日間の体験を通して、自分でも驚くほどに子どもに対する印象は変わりました。初日は子どもと関われる気がしなかったのが徐々に仲良くなり、自ら声をかけに行き、友達のように話せるまでになりました。障がいによる差別やいじめが報道されたりしていますが、障がいの有無で何も変わりませんし、私が出会った子どもたちは少し自分の思いを表現するのが苦手なだけです。障がいの有無をなるべく意識せず「普通に」接することが肝要です。基

本的に「こういう障がいを抱えているから、こう接しよう」などと考えてしまいがちです。基本的な知識を持つのは当たり前ですが、子どもと向き合う際には極力意識せずに接することが重要なのだと思います。

施設職員の方々はどんなに大変でも「面倒だ」「嫌だ」と言う人はいませんでした。これが子どもに「関わる」ということなのだたと尊敬の念を抱きました。末筆ながらこのような貴重で素晴らしい体験をさせていただいた施設の方々に感謝申し上げます。

---

## 第8回「教職課程同窓生の集い」を終えて

2021年12月11日（土）に第8回「教職課程同窓生の集い」を大宮校舎とオンラインのハイブリッド形式で行いました。この集まりは、本学の教職課程で教員免許を取得し、教師として全国の学校の教壇に立っている卒業生たちが1年に1度集まり、教職を目指す現役の学生や教員たちと懇親を深めることを目的に、8年前から行っているものです。

第8目となる今回は、若手教員である卒業生2名にシンポジストとして登壇していただき、教員生活や教科指導、部活動の指導のことなどについて、現役の学生や教員となった卒業生、歴代の教職課程を担当された先生方を前に、お話をさせていただきました。

お一人目は、埼玉県立久喜工業高校で数学の教員をされている鈴木宏昭先生にご登壇いただきました。鈴木先生からは、工業高校の生徒の様子や数学科教員としての教科指導、登山部の顧問として、生徒たちを引率して登山する様子などが紹介されました。お二人目は、埼玉県立杉戸高等学校で数学の教員をされている庭田省吾先生にご登壇いただきました。庭田先生には、当日のお話をまとめていただきましたので、以下にご紹介いたします。

コロナ禍が小休止していたこともあり、キャンパスには卒業生の皆さん、在学生の皆さんに集まっていたいただき、オンライン参加の皆さんとの交流も生まれ、大変盛会となりました。

## 「教職を目指す後輩の皆さんへ」

埼玉県立杉戸高等学校 庭田省吾

システム理工学部 数理科学科 2014年3月卒業  
大学院システム理工学専攻 2016年3月修了

教員生活6年目を迎え、今回このような機会をいただきありがたく思います。今回の集いでは、「生徒指導・教科指導における工夫」という視点で、学生に伝えた内容をまとめます。

## ●授業以外での生徒の様子を観察

生徒の様子を観察すること、授業や部活動での様子で気になることがあれば教員間で共有することは当たり前です。しかし、授業や部活動以外でも、あるいは他教員からの話だけでなく、自分の目で生徒を見るようにしています。例えば、朝SHR前にクラスへ行き、誰が、誰と、何時ごろ登校しているのかを観察したり、他教科の授業での様子を観察したりしています。担当している授業だけでは捉えられない生徒同士の交流や得意不得意、生活リズムを知れます。

## ●予習を前提にした授業の展開

高校卒業後、生徒達は自力で歩んでいかなければなりません。いつまでも、教えてくれる存在が近くにいるとは限りません。そのため、授業でも「予習(=自分の頭で考える)を前提にした授業」を行っています。教員が教科書の内容を簡潔に、分かりやすく伝えることは簡単です。しかし、それでは教えてくれる存在が居なくなった途端に生徒達は何もできなくなります。また、教科書や教員の言ったことを鵜呑みにしないことも大切です。卒業後は自分で自分の力を向上させることが必要です。その第一歩として「予習」は大切だと考えます。しかし、単に予習をするように伝えても、生徒は何をす

れば良いのか分かりません。そのため、予習を補助する「質問事項」を事前に配布しています。それにそって予習を進め、授業ではその質問に対する解答を生徒間で共有・議論します。

数学が得意であれば得意なりに、苦手なら苦手なりに考えることはあります。数学が「得意であれば予習も得意で、苦手であれば予習も苦手である」は成り立ちません。得意な生徒ほど無意識のうちに通り過ぎてしまう大切な疑問点や視点に、苦手な生徒ほど気づけます(「得意」、「苦手」の意味が曖昧ですが、ここでは割愛します)。「分かりやすい授業」も大切ですが、「生徒が考える、考えようとする授業」の方が重要です。

## ●大学級の数学(以下、大学数学)の理解の大切さ

中高生相手に大学数学を行うことはほぼありません。しかし、大学数学を理解した上で授業を展開するのか、そうではないのかで、伝え方や説明の重みが変わります。そのため、例えば教員採用試験に出題されなくてもきちんと大学数学を学び続ける必要があります。

最後に、教員採用試験合格が最終目的ではありません。その先にもやるべきことはたくさんあります。教員になってからも苦勞することは多いと思いますが、皆同じです。芝浦工業大学にはこのような集いがあるので、教員になってからも互いに支い合える環境があります。このような機会をお互い活かしつつ教員生活を送っていきましょう。

# 教育実習体験記

## 「教育実習をふり返って」

工学部 電子工学科 鈴木 直斗 (高校 工業)

私は自身の母校である福島県の工業高校で教育実習をさせていただきました。その工業高校は機械科、制御科、情報科などの学科があり、私は制御科での実習を行いました。

教育実習の前に顔合わせも兼ねた事前打ち合わせが行われました。校内の会議室に通されると、既に数人の実習生と教員が座っていました。指定された席に座っていると、他の実習生と高校生当時の担任の先生が顔を見せに来てくださり、緊張がほぐれました。定刻になり、実習中のルールや基本的な一日の流れ等一通り説明を受けました。その後は各々担当する学科の事務室(以後”科務室”という)に案内され、説明を受けました。科務室には既に私専用の机とPCが用意されており、本当に快く私を迎え入れてくださいました。

実習初日は緊張の連続だったのを覚えています。まずは職員室での朝礼で自己紹介をしました。緊張でガチガチの私に対して実習校の先生方はとても暖かく迎え入れてくださいました。その後は担当の制御科1年(以後”S1”という)クラスへ挨拶に向かいました。S1の生徒達からは物静かな生徒が多い印象を受けました。

初めの一週間は授業を見学する時間が主でした。教員側は生徒達をどう把握しどう授業を展開してくのかを見学しました。教員の仕事は常に人前での行動なので、肉体的疲労よりも精神的疲労が多かったです。一週目にしたことはま

ずはS1の生徒の顔と名前を一致させることです。それによって生徒とのコミュニケーションがより円滑になると考えました。実際にこれは現場の先生方にも高い評価を頂くことができました。

二週目からは実際に教壇に立って授業実習を行いました。物静かな印象を受けていた生徒達が予想以上に反応を示してくれました。これは名前をしっかりと覚えたことが大きかったと思います。板書の文字が大きすぎてしまい、何度も黒板を消してしまった点は、後に改善しました。工業高校には課題研究と呼ばれる授業があり、三年生の課題研究も見学しました。三年生は進学を意識している生徒も多数おり、実習生としてアドバイスしたりもしました。また、大学での生活や自分が高校生時代に考えていたことなども話すことができました。

最後の週は授業実習に加え、教育実習のメインイベントである研究授業を行いました。研究授業に向けて、何度も板書計画を練り、空き教室を利用して練習をしました。また、授業内で扱う演習プリント等も作成しました。

研究授業で意識したことは主に声の大きさと時間配分です。また、発言の多い生徒だけでなく全体を見て授業を展開することも意識しました。当たり前の事ですが、これが思いの外難しかったです。研究授業への参観には非常に多くの先生方が足を運んでくださり、それに比例するように緊張もしましたが大変光栄でした。また、大学からは牧下先生も足を運んでくださり、大変嬉しかったです。授業自体は概ね計画通りに進み、科務室の先生方をはじめ多く

の先生に好評を頂くことができました。授業内で使った自作の演習プリントは完成度が高く、これに関しても高い評価を頂くことができました。反省点を挙げたらキリはないですが、校長先生からは及第点を頂くことができました。

実習前は長いと感じていた実習も、振り返ってみればあつと言う間でした。実習中の15日間、一日として同じ日はなく毎日が新しい発見の連続でした。前まで同じ問題に苦戦していた生徒が次の日には難なくその問題を解けるようになっていたり、生徒が私の名前を覚えてくれたり等、大変充実した教育実習でした。ありがとうございました。

## 「教育実習を終えて」

工学部 応用化学科 若林 茉奈 (中・高理科)

私は埼玉県の公立中学校で3週間教育実習を行いました。実習期間が10月末スタートで芝浦の他の生徒と比べて遅い時期だったため前期に実習を終えた友人達から体験談やアドバイスを聞いてから挑むことができましたが、それでも毎日新しい発見の連続でした。

実習生として初めに実習校を訪問したのは実習が始まる10日ほど前に行われた打ち合わせです。登校日と担当クラスについて教頭先生から説明を受けた後、教科指導担当の先生から授業範囲についての説明を受けました。教頭先生は私が中学生だった時の担任でほぼ雑談のような打ち合わせだったため、危うく初日の集合時間も持ち物も知らされないまま打ち合わせが終わるところでした。「連絡されるだろう」と思わず、打ち合わせまでに知らされていない実習に必要な情報は聞き忘れないようにメモしておくことをお勧めします。また、私の場合、教科指

導担当の先生から実習が始まるまで授業準備は必要ないと言われたため、実習前の準備は教材に目を通す程度で指導案作製は実習が始まってから行いました。

実習が始まると時間があつという間に過ぎていきました。はじめは学級指導、教科指導とにも見学だけでしたが、先生方がどのような点に気を付けながら指導を行っているのか、各クラスどのような生徒がいてどのように授業展開を変えるのかなど、自分が生徒の立場では気にも留めなかった点に着目して参加するホームルームや授業は先生方の特色がよく表れており、この期間にいかに多くのことを学び取るかが大事だと感じました。そして迎えた初ホームルームと初授業実践、担当生徒たちは一生懸命静かに話を聞いてくれるのですが質問に対しても反応が薄く、受け入れられているのか、内容を理解してくれているのか、不安になりました。生徒に聞くと「堂々として本物の先生みたいだよ」と答えてくれるものの、やりにくさは続きました。そこで生徒個人の特徴をつかむために休み時間に話しかけたり、授業中に発言しやすい雰囲気を作るために近くの人と話し合う時間を設けたりし、仲良くなった生徒や話し合いで活発に意見交換していた生徒を指名して質問に答えてもらうことから始めました。するとクラス全体の投げかけに対しても段々リアクションが返ってくるようになりました。それだけでなく、話し合いの場を多く設けたことで実験後なぜそのような結果が得られたのか生徒同士で自発的にディスカッションを行うようになり、私の力だけによるものではありませんが生徒の成長の速さに驚かされました。

始まる前は長いと感じた3週間の実習期間は人生で最も短く濃い3週間でした。私は教員以外の進路を歩むことになりましたが、この教育

実習で学んだことは今後の人生に生きてくると  
思います。

### 「教育実習の経験をふり返って」

システム理工学部 数理科学科 佐藤 広大  
(中・高 数学)

私は3週間、茨城県内にある母校の公立中学校で教育実習を行いました。実習校は全学年2クラス制で、私は1学年の2クラスの数学の授業を担当し、配属学級も1学年のクラスを担当しました。1週目は授業見学や先生方から講話をいただく時間が中心で、2週目以降は「数学」の授業や担当クラスでのHRを行いました。そして3週目に研究授業を実施しました。

私は塾講師や家庭教師の経験が無かったので、実習が始まると「先生」と呼ばれることに戸惑い、母校での実習であっても不安や緊張を持っていました。しかし、少しずつ1人の教員であることの自覚を持てるようになり、教科指導担当や学級指導担当をはじめとする教職員の方々、そして生徒が作り出す良い雰囲気、環境に助けをもらいながら実習を行うことができました。

授業見学では、単元に合わせた指導法を知ることができ、黒板の使い方、発言の方法・意図、時間の使い方など1つの授業を生徒と共に創っていく難しさを身にしみて学ぶことができました。これらを自分の実習授業に活かそうと思っても簡単なことではありませんでした。教壇に立って授業をすると、新たに見えてくるものがあり、たくさんの壁にぶつかりました。それでも教科指導担当の先生や他学年担当の数学の先生の指導を毎授業後に受け、少しずつ改善してより良い授業を目指しました。

研究授業は実習の中で一番の出来の授業を実

施できたと感じていますが、それでも改善点が  
多々ありました。研究授業は学級指導担当をは  
じめ多くの先生方からアドバイスをいただき、  
その全てが教育実習の財産になりました。授業  
全体を通して、教材研究と生徒理解の大切さを  
一番に感じました。教えるべき内容へのアプ  
ローチや、教科書のねらいを授業者が理解でき  
なければ、生徒は授業を受けても十分に理解す  
ることはできません。そして研究した教材を生  
徒やクラスの特色に合わせて指導しなければな  
りません。授業を行う中で生徒との関係が重  
要なことであることを実感することができまし  
た。

教育実習を通して教員のやりがいを感じるこ  
とができました。大変なこともたくさんありま  
したが、それ以上にやりがいや楽しさを感じま  
した。充実した3週間を過ごすことができたの  
は、教育実習先の先生方、そして、子どもたち  
のおかげです。本当に有難うございました。教  
育実習で得られたことを社会人として今後の生  
活に活かしていきます。

### 「教育実習の経験を通して」

システム理工学部 生命科学科 山浦 月見  
(中・高 理科)

私は、5月から6月にかけての3週間、母校  
である都内の私立高等学校にて教育実習を行  
いました。教科では特進1年生の化学基礎を計4  
クラス担当し、そのうちの1クラスはHRも担  
当しました。最初の3日間は球技大会で、その  
後は指導教諭による授業の見学を挟んでから教  
壇実習という流れで実習が進んでいきました。

私は実習が始まる前から「最初の3日間は勝  
負だ」と心に決めており、事前訪問での打ち合  
わせから実習が始まる前までの間に、ある程度

プリントや指導案は作っておいて、球技大会期間は生徒との関係作りに専念しました。試合間の待ち時間や応援を通してHRクラスの全生徒と会話をし、名前も覚えたことにより、4日目以降の実習をかなり円滑に進めることができました。

3日目以降は模擬授業を毎日行い、全コマ教壇実習や授業見学を行ったあとに指導教諭と1対1で数時間模擬授業をしてから帰宅するという日も沢山ありました。実際に授業をしてみると、いかに自分の知識や内容が浅いかという事が痛感され、事前に作ったプリントや指導案も日々修正と改善の繰り返しでした。そのような中で指導教諭から毎日のようにかけられた言葉は「もっと目を良くして」でした。物質1つとっても、目を凝らしてみると既知の知識や他教科と繋がるような特徴が沢山あるのに、私は教科書の内容を終わらせることに意識の中心が傾いてしまい、つい「知識の羅列」いわば

「点」ばかりを教える授業をしてしまっていました。そこで、指導教諭とは「目を良くする」を合言葉に「点と点を線でつなげる網目学習」を意識した授業展開を日々研究し続けていきました。そして教壇実習の後半ではそれがかなり形になり、生徒が自主的に関連学習を行って質問に来てくれたり、知識が結びついてとても楽しいと言ってくれたりもしました。この経験から、印象に残りやすく効果的な授業を行う上で、いかに関連付けが大切であるかという事を学びました。

本誌では授業づくりを中心に記述しましたが、その他の経験も含めた実習全体を通して、教師の難しさを改めて痛感するとともに、困難を乗り越えたからこそ味わえるやりがいも沢山感じることができました。ここで経験したことを胸に、今後の教員人生へ活かしていきたいと思えます。

## 教員採用試験 合格体験記

### 「教員採用試験を受ける皆さんへ」

大学院 システム理工学専攻 宮川 裕樹

私は今年、埼玉県の中・数学の教員採用試験を一般受験しました。そして、多くの方々から熱心なご指導を頂き、私は合格することができました。私が合格までに取り組んだことを簡単にお話します。

まず、一次試験についてです。最初に私は、過去問を解いて試験傾向の把握を行いました。その後は参考書を何周もしました。試験勉強は

「毎日取り組む」ことが重要だと思います。私は毎日の自宅での勉強に加え、電車での移動中など、隙間時間を活用して勉強しました。

次に、二次試験についてです。私はキャリアサポート課を利用し、毎週欠かさず行っていました。そこで私は論作文対策を中心に、毎週論作文を添削していただき、次回までに書き直すことを何度も繰り返しました。最初の頃はあまり具体的に書けなかったり、内容が飛躍してしまったりすることがありました。しかし、何度も書き直すうちに書き方に慣れ、書ける内容も増えていきました。面接対策では、教師を

目指す理由や長所など自分自身に関することや、いじめや不祥事など学校現場でのことについて考えを深めていきました。その後、面接形式で受け答えの練習をしました。二次試験対策では「自分が他者からどう見られるか」を知ることが重要だと思います。自分ではできているつもりでも、他者からは良い印象でないということはよくあることだと思います。私は、友人やキャリアサポート課で客観的に評価してもらうことで、自分の文章や話し方がどう見られるかに気づくことができました。一人だけで二次試験対策を行うことは難しいと思います。教職を志す皆さんは早めにキャリアサポート課へ行くことをお勧めします。きっと皆さんの背中を押ししてくれます。

最後になりますが、キャリアサポート課の橋本先生にはたくさんのご指導や励ましの言葉をいただきました。先生のお言葉が私の自信に繋がりました。この場をお借りして御礼申し上げます。来年から始まる教員生活が充実したものとなるよう、これからも努力し続けたいと思います。

### 「教員採用試験合格までの道のりとアドバイス」

大学院 応用化学専攻 竹ノ内 智哉

「ようやく合格できた。」これが教員採用試験の合格通知を受け取ったときの私の感想でした。というのも、私にとって今回の採用試験は2度目の挑戦だったからです。教員になりたいと本気で考え勉強を始めた時から約2年間、教職課程の先生をはじめ様々な方から励ましとアドバイスをいただきながら対策を続け、ついに合格をもらうことができました。そんな私が教職課程を履修する皆さんに向けてやってよかつ

たこと、教職課程の履修を続けていくうえでのアドバイスを少しばかりではありますが紹介させていただきます。私と同じく教員を志望している学生に少しでも有益なものとなれば幸いです。

はじめに、教員採用試験を受けるうえでやってよかったと思うことを紹介します。

1つ目は、試験対策時間を確保することです。教員採用試験の1次試験では一般・教職・専門の3つに関して教養が問われる筆記試験がありました。これらの試験はある程度傾向があるものの、幅広い分野から出題されるため、これまでに学んだことを総復習する必要があります。私は塾講師として中学生と高校生を指導しており、指導を兼ねて学習内容を復習する機会が確保できていたため一般教養・専門教養は危なげなく得点することができました。また、教職教養は大宮で開講されている外部の対策講座に参加し、傾向と対策を教えてもらいました。その後、図書館などで試験に合わせた勉強を行う習慣をつけることで勉強時間を確保しました。日々の生活で大変だとは思いますが、筆記試験が心配な方はやってみることをお勧めします。

2つ目は、教育ボランティアの活動です。私は、学校等で子どもの学習サポートを行うボランティア活動を行っています。これらの活動を通じて、様々な子ども達と関わる機会が得ると同時に子どもとのかかわり方や指導の工夫、子どもに合わせた指導の大切さを学ぶことができました。教員採用試験の面接ではこの経験が役に立ち、面接官の質問や場面指導に対して自信をもって回答することができました。さらに、子ども達や先生方と直に接することで最近の流行や学校事情についても知る事ができるため希望する自治体の学校で活動してみるのもおす

すめです。ボランティアの募集は、自治体のホームページに掲載されているので興味のある方は一度調べてみるといいと思います。

最後に一つ、アドバイスとして私が大切にしている考えを紹介させていただきます。それは、“チャンスを逃さず経験をつかみ取る”ということです。私たちの周りには、大学の内外問わずたくさんのチャンスが転がっています。それは授業やサークル活動かもしれませんし、ボランティアやアルバイトかもしれません。ときには自分の成果を発表する機会に出会うこともあると思います。私が最も伝えたいことは、そういった機会やチャンスを逃さず真剣に取り組み、そこで得た「経験」を自分の武器として積み重ねていってほしいということです。私が教訓としている言葉に「知っていること以上のことは教えられない。」という言葉があります。

これには“知らないことは教えられないし、教えたことを全員が完璧に理解できることはない”という意味が込められています。あたりまえの話ですが、教える立場の教員が知らないことは教えられないし、理解できていないことをそのまま教えたとして、子どもが理解できるはずがありません。だからこそ、教員は自分の立場を自覚して子ども以上に多くを学び様々なことを知っていく必要があるのだと私は考えています。大学の4年間は長いようであつという間です。悔いが残らないようにできることはとことんチャレンジしましょう。

この度の合格は、あくまで一つのスタートラインに過ぎません。これまでお世話になった方々に感謝しつつ、これからのことを考えて私も様々な経験を積んでいきたいと思っています。

● 編集後記

2021年度の「教職課程だより NO.46」をお届けします。本号の巻頭では、2021年度に設置された教職支援室の室長の奥田宏志先生に寄稿いただきました。また、介護等体験記を3年生の1名の学生さんに寄稿していただきました。コロナ禍における体験で苦労もあったことと思いますが、これから介護等体験に行く皆さんの参考になればと思います。また、教職課程同窓生の集いで登壇いただいた2名の卒業生のうち、庭田省吾先生から寄稿いただきました。たくさんの卒業生と在学生が集まり、にぎやかで温かい会になりました。

た。この集いを、同窓生と在学生の橋渡しの機会になるよう、今後も継続して行く予定です。ご参加いただいた皆様、ご協力くださいました先生方、事務職員の皆様に御礼申し上げます。

最後に、教育実習体験記を4名の学生さんから、教員採用試験合格体験を2名の大学院生さんに寄稿していただきました。教員を目指す皆さんにとって大変貴重なメッセージとなったことと思います。お忙しい時間を割いてご執筆いただいた皆様、誠にありがとうございました。(谷田川)

教職課程だより 2022年3月号(通巻46号)

編集  
発行

芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 教職支援室

〒337-8570 埼玉県さいたま市見沼区深作307

TEL : 048-687-5049 FAX : 048-687-5048

e-mail : edudvp@ow.shibaura-it.ac.jp